

学校のIT化は学校のGLOBAL化：iEARN導入の必要性

高木洋子

グローバルプロジェクト推進機構

〒569-1036 大阪府高槻市塚脇 1-11-25

TEL 0726-88-3415 FAX 0726-80-2115

yoko@jearn.jp

概要

本稿は、通信科学の発展に伴って訪れた急激な情報化社会と社会のグローバル化に対応して、IT化が進められる教育現場では、一向に進展しない世界の子どもたちと日本の子どもたちのITを使った国際間協働学習や、日本の教師と世界の教師との交わりの少なさに起因する問題点をあげ、それらの解決法として、iEARNという世界で最多の参加国があり、最も信頼されている教育ネットワークを紹介し、導入することで、21世紀型教育のGLOBALな教育の流れに乗り、子どもたちを世界へつなぐとするものである。

1. はじめに

学校のIT化は学校のGLOBAL化と言えろ。ITと言えろ、情報を外から自在に得る、情報を外へ発信すると強調されてきたが、ITこそ、教室が世界のどの国にありと生徒と生徒が共同で学習し協働で作品を作る、或いは山奥の子どもが世界の教室に自在に出入りできるという、未だかつて経験したことのない教育環境を提供する情報技術である。チームを組んだ国々の生徒が、選んだテーマを協働で研究し発表する環境がある。実に相手チームは中国、韓国、モンゴル、南アフリカ、イラン、ヨルダン、ロシア、オランダ、カナダ、コスタリカ、アルゼンチン、ハワイ・・・世界中どこでも教室となり学習仲間がいてチームが作れる、このような可能性を秘めた現在である。IT化によって、ここに学習内容と、学習の場である教室に、21世紀型教育のGLOBALなスタイルが生まれている。一方、日本においては学校のITが生徒の一人一人を世界へつなぐ道具であるにも拘わらず、

その道具が使われていない。使われない理由はなにか。つまり学校現場では新しいGLOBALな教育の流れを知らないか、或いはその流れに加わる必要がないとしているからである。そうだろうか。知らず、いらすずでいいのだろうか。

2. 社会の情報化・グローバル化と学校教育

2.1 情報化社会へ

民族・国家・宗教・イデオロギーの対立を、20世紀の100年間、人は戦争という手段を使い、国を守り人を守ると信じて戦った。戦った相手は例えば隣の国であり、そこを生活の場とする人であった。核兵器という地球惑星を容易に破壊できる武器を作り、その威力は日本の広島・長崎ですでに証明済みである。同時に森林を砂漠化し生物体系を破壊することにも無知・無関心であった。目の前さえ美しければ、自分さえ食べられれば、よかつたのである。

しかし近年、通信科学の発達は、地球環境の現実や敗れた国の人の悲惨を、情報という形にして人に届けるようになった。衣食住を持てる人である。夜昼なく洪水のように溢れる情報は、ある人には文字の羅列で意味がなく、ある人には単なる

“IT at school and Globalization in Education:

Necessity of iEARN”

Yoko Takagi

Global Project Promoting Organization

知識を得る源であり、ある人には何かしなくてはと思案させ、ある人には行動を起こさせる。

この情報の嵐は、満足して生活している人に、自分の外の、家族外の、地域外の、国外の、地球の外の現実を、見せて聞かせる。僅か50数年前に敗戦を経験した日本では、自分の夫や息子がどこで爆死し或いは餓死したかの情報さえ伝わらなかった。今、地球の反対側の地震が、数秒で全世界にニュースとして知らされる。つまり日本の片田舎に住んでいても、否応なく地球とか世界とかに向き合わされている。50数年前であれば知らなくてすんだ悲惨な事件や災害が日常の生活の中に進入して、大人達は、なんとなく行く末が不安という不安症候群を生み、自信をなくしている。

このように情報は、テレビ・ラジオ・インターネット・新聞その他、あらゆるメディアを使って日常生活の中に世界を送り込み、生活者は「世界という世間」に無関心・無視を続けられない時代となった。

2. 2 社会のグローバル化

この情報化社会を背景に、社会のグローバル化は始まった。マーケットに見られる日常生活必需品のグローバル化は言うまでもない。中国からの安く新鮮な野菜は、当地生まれの筆者には特に魅力的である。更にNPO環境グループ、JICA活動、国境を越えたネットワーク、産業界のリーダー、科学・技術のリーダー、政治のポスト、夢中になる音楽やスポーツなど、インターネットの普及と相まって社会のグローバル化が急速に進んだ。

2. 3 学校教育の現状

では、このように情報化・グローバル化された社会を生きる次の世代への学校教育はどう変化したか。パソコンが設置され、インターネットに接続し、情報教育が始まり、IT化は着々と進んでいる。そして、その優れた情報環境を使って世界の学校やネットワークへ自在にアクセスし共同学習を行っているかという、NOである。学校の情報環境が最も威力を発揮できる教育のグローバル化の観点がなく、国際共同学習も一般的ではな

く、教師同士の協働プロジェクトもない。国際交流ニュースと報道されても、個人の教師の努力に負う場合が多く、学習の中に定着せず生徒達も一時的な興味で終り、日本からの参加を待たれている海外のネットワークとは連動していない。しかし、この情報化・グローバル化という学校教科書に留まっておれないほどに変転極まりない「生」の生活に対して、学校教育では生きる力、生活する力をつけ、世界という「生」の社会にチャンネルを合わせる必要が出てきたはずだ。

3. 戸惑い

急激な社会の変化に、容易には変えない教育が正しいのか、変わるべきなのか、今は分からない。しかし、その狭間で子どもたちの、教師の、親の、企業の戸惑いが見える。

3. 1 子どもたちの戸惑い

故マザーテレサが来日した際、日本の子どもたちを見て“Poor Japanese Children”と言われた。豊かな食べ物と溢れる持ち物に恵まれた子どもたちの、意識下の無気力感、無関心感を鋭く読まれたものと思われる。バーチャルな殺人暴力の世界、試験競争、学習時の退屈さ、自分を否定的に見て価値あるものとせず、他人に対して無関心、友人とは距離をおいてトラブルを避け、自分をオープンにすることを恐れる。他人との協働の経験に乏しく、自分の手許にどんなに多くのものがあるか知らず、自分がどんな可能性を秘めているか信ぜず、持っているもの・身に付けたものの使い方を知らず、自分の立つところを知らない。本当に充たされるものを求めて歩く知恵もなく、時間を無為に過ごす子どもたち。

学校では、変わり映えのしない教室。同じ日本人。比較する対象がなく、単純な評価に達成感がない。発見が少なく、ワクワクする材料に乏しく退屈だ。作品は先生の点数による評価だけで終わり。自分だけのオリジナルを創ったのに。。つまらない。

3. 2 教師の戸惑い

教師の場合：総合的な学習の時間は、なにをし

ていいか分からない。IT 関連機材が運び込まれるのに、どう使うのか、なにが出来るのか分からない。むしろこの新しい頂き物はお荷物なのだ。もう十分に疲れ果ててしまった。ゆとりの時間をとってみずみずしくなるべきは教師ではないか。

3. 3 親の戸惑い

一人立ちして生活できる力を親は期待して、セッセと税金を払い、余分に塾にもやるのに、出来る息子や娘はフリータやら引き篋もりが多い。シラーとして自分の未来も他人まかせだ。こんな筈ではない。若者には生きる目的がないのか。

3. 4 企業の戸惑い

基本的な人との付き合い方を知らない学生たちだ。創造性に乏しく柔軟な協調性にも欠ける。世界の動向に無関心な勝手人間で、国際的なセンスもない。子どもの頃からの教育が必要だ。

3. 5 万全にみえる教育：でもなぜ？

知育・理解を深める教科教育、IT という道具の使い方を教える情報教育、色・音・美の情操教育、伝える媒体である英語教育、総合して自己表現をする総合的な学習。世界とつながるための全ての用意が整い万全である。にも拘わらず、何もないのはなぜか。日本の子どもたちが世界とつながっていないのはなぜか。

そこで、「はじめに」に述べた 21 世紀の IT を利用した GLOBAL な教育の流れを、知らないなら知ったらどうだろう。流れにつながって見たら、どうだろう。戸惑いの子どもたちを世界へ連れ出してみたら、どうだろう。

4. 子どもたちを IT で、広がる世界へ

つながるもの：それが iEARN

社会のグローバル化に対応し、日本の教師も生徒も子どもたちも世界のネットワークの仲間となる時期である。言葉の壁はあるが、その理由で孤立するわけにはいかない。学校のグローバル化の鍵は、「グローバルプロジェクト導入」、「英語対応」、「教師のグローバルネットワークへ仲間入り」の 3 点である。そしてこの 3 点を同時に解決するの

が、iEARN (International Education And Resource Network: アイアーン <http://www.iearn.org>) の存在である。

4. 1 子どもたちがつくる小さな変化

iEARN 理念の冒頭には次のようにある。iEARN のビジョンと目的は、この地球とそこに住む人々の健康と福祉に対して、意味のある関わり方ができるようにデザインされた iEARN プロジェクトに、子どもたちが参加することである。そして創立者ピーターコーペン氏は、対象をイメージする感性、相手を思いやる感性が大切であると、「Compassion」を繰り返して説く。iEARN に、「Connecting Youth, Making a Difference in the World」というフレーズがある。5-19 才を対象に、彼らがオンラインプロジェクトに参加し、世界的な紛争や災害に関心を寄せ、自分達にとれる小さな行動を見つける。その行動が昨日とは違う小さな変化を生み、明日の平和に皆の思いがちながる貴重な体験をする。その行動とは実に多様で、実際に援助につながる行為、或いは共同研究、絵画や詩、音楽、エッセイを通じての主張、協働作業による物作りであったりする。子どもたちが作り出した小さな変化は、大人社会が「無理だ。理想だ。誰か政治家がすることだ」と諦めて手を出さない事柄に、子どもらしい柔軟な視線と行動で、まったく自然に解決を見出し、或いは、解決へ向かうドアの鍵を探し出す。大人はこれらの iEARN っ子の行動に触発されて、大きな運動になる。行動を通して自信を得た iEARN っ子は、やれば出来るんだと確信する。子ども時代からのこの積み重ねによって、誰にとっても安心して平和に住み合える世界の実現へ至ると iEARN は、教育に希望をおく。

4. 2 実践して変える子どもたち

iEARN のグローバルプロジェクトで、いくつかの変える子どもたちの実例を挙げてみよう。

【エクアドルの井戸プロジェクト】

エクアドルの村の井戸が壊れたニュースを聞いたあるアメリカの小学校で、子どもたちが考え出したのは、電気屋さんで貰ったダンボールを使

ってお化け屋敷を作り。生徒たちに 25 セントの切符を売って、溜めたお金が 525 ドル。それを送るといくつかの井戸も修理できて、村の女の子から手紙が届いた。「iEARN のみんなのお蔭で、私は毎日 6 キロの道を歩いて水を汲みにいかななくて済むようになりました。今、学校に通っています。」たかがある村のいくつかの井戸かもしれない。でも子どもたちは、女の子が学校へ通えるようにした。小さな **Make a difference**。しかし、この話は語り継がれて大人も子どもも励ましている。こんな日常的なことでもいいのだと。

[Dream School Video Conference]

5大陸を結んでテレビ会議を続けている。ペアを組んで相手の国の参加者に、自国語で創作した歌を、そのまま歌ってもらう。こちらも相手の国の言葉で、向こうの創作した曲を歌う。各チームは持ち時間の 15 分をどうプレゼンテーションするかを、用意したフォーラムを使って 2 国の生徒同士が話し合い企画し練習する。次は日本の参加校でウクライナが相手国となった埼玉県の高校生のコメントの一つである。「先生がウクライナの先生と勝手にスケジュールを決めてしまって、交流の面白いところを一人占めしてしまった。今度は自分たちだけでウクライナの生徒と企画する！」という生徒の独立宣言である。

[Comfort Quit Project]

9センチ四方の布に自分の顔をキルテングして、9枚を合わせる。丁度、肩を覆うサイズになる。慰めの言葉とともに、世界中から集められたキルトは、NY のテロで消防士の父親を亡くした子どもたちへ配られ、避難テントで冷たい冬を越すアフガニスタンの子どもたちにも配られた。

[Folk Tale Project]

尼崎市の高校の話である。通常なら終了後にゴミ箱行きになる秋の文化祭での大作「わらしべ長者」は、デジタルカメラで丁寧に撮られ、晴れて iEARN 「民話」プロジェクトに仲間入りして保存され、サイトを訪れる各国の子どもたちに読まれている。

[YouthCaN]

歴史博物館のある部屋を根拠にして活動している高校生による環境チームである。毎年のテーマ、企画運営、世界大会を全て高校生・中学生が行う。大学生や教師、教授はあくまでもアシスタント。毎年、その創造性の豊かさに唸る大人である。

[Side By Side]

20センチと 80センチの用紙いっぱい自分の 10年後の姿を描く。世界中の衣装をまとった子どもたちの描く自画像が iEARN 会場に「サイド バイ サイド」すると、そこは既に iEARN の世界。鳥取の小学校 5 年生・6 年生のサイド バイ サイドをもらったフロリダの小学校からメールが来た。「あなたは将来、きっと有名な画家になるわ。だってこんな綺麗な靴の色が出せるのですもの。」「君は野球が好きなんだ。バットが格好いいね。」こんなメールが延々と来る。嬉しくない筈がない。

[Teddy Bear Project]

人気のテディベアプロジェクトであるが、三重県のある学校では送り出す「クマ太郎」の送別会をした。新聞社も報道した。郵便局の人に学校までクマ太郎を迎えに来て、子どもタがバイクの後ろを追いかけた。相手校からフェリシテイが送られてくると歓迎会。卒業式も一緒。子どもたちはテディとドラマをたくさん作った。地域も親も教師も一緒にそのドラマに参加した。

5. 周りが変わる

5. 1 参加して変わる教師

5. 1. 1 「国際交流学习の可能性と iEARN」

iEARN メンバーの兵庫県立小野高等学校板東先生は、教育研究会英語部会発行の「はくぼく」第 28 号「国際交流学习の可能性と iEARN」投稿で、「少しの時間と思い切りで、生徒たちの瞳が輝くような体験をプロデュースできるようなチャンスが国際交流学习にある」と書いておられる。「また子どもたちから自ら失敗と成功を体験できる時間と場所を奪い、最も効果的でよいと思われる方法を常に与え続けて、子どもたちに中毒状態をおこさせてはいないでしょうか。子どもたちが自分を発見し、社会との関わりの方を考えしっかりと

成長するための手助けをするチャンスのひとつが国際交流学習にあると思っています」と続く。

iEARN プロジェクトに参加して子どもたちに学習意識と興味と達成感、未知との遭遇、相手チームとのコラボレーションを体験させよう。道具は揃っているのだ。教師がやり過ぎず、準備し過ぎず、ファシリテータに徹する。自分で子どもたちの発見の楽しみを奪ってはいけない。教師は、自分の子ども時代を思い出して欲しい。一番ワクワクしたのは、悪戯でも誰も思いつかないことを思いついた時だった。冒険だった。一番、伸びた時、自分で求めて探しに行く時だった。一番、満足した時、自分のしたことを他人によって認められる時だった。一番、グループでやる気を見せた時、全体の中の自分の役割を把握した時だった。

5. 1. 2 教師の国際化

また、国際化を担当する教師が、多くの海外の教師と出会い、それぞれの学校事情・通信事情・教育事情を話しこみ、互いに教師仲間意識を共有することが、今後、国際間共同プロジェクトをスムーズに、且つ継続して進める上で必要なことである。互いが相手の立場とその生徒のことを考えるから無責任にはできない。生徒に国際化を云々する前に教師自らの国際化が必要である。

しかし、最近は疲れた教師が少なくない。疲れた教師は、新たに人や情報システムと関係を築くことを躊躇する。チャレンジを避けて従来の慣れた教育スタイルに固執し生徒には教害を及ぼす。まず、たっぷりのサバティカルを取って心身共のリフレッシュをし、みずみずしさと柔軟さを取り戻し、海外の教育ネットワーク会議やワークショップに参加して国際間ヒューマンネットワークを学校に持ち帰り、国際共同プロジェクトを生徒と共に立ち上げる。教師が生き生きすると生徒が輝きはじめる。

5. 1. 3 iEARN 国際会議：教師仲間

iEARN は毎年、世界のどこかで1週間にわたるI * EARN国際会議を開催する。第一回アルゼンチン1994年・第二回メルボルン1995年・第三回ブタペスト1996年・第四回カタロ

ニア1997年・第五回チャタヌーガ1998年、第6回プエルトリコ1999年、第7回北京2000年、第8回ケープタウン2001年、今年(2002年)は第9回モスクワであった。第三回から参加しているが、参加国も参加数も年毎に増え、今年(2002年)は64ヶ国から689名の教師が寝食を共に1週間を過ごした。年間プロジェクトの報告や、新プロジェクトの練り直し、テクノロジーの習得、グローバルネットワークとしての方向付け、世界各国の教育情報交換の1週間であるが、さしずめ地球サイズの学校職員室と言った風情である。勿論、食事時や夕刻はソーシャルタイムで教師間の友好密度が濃くなる。ここで育った信頼関係は、その後の共同プロジェクト運営を成功させる大事な要因となる。

このようにヒューマンネットワークは、日頃よく聞かれる国際間共同学習やメール交換の問題点の多くを解消し、教師同士はコラボレーションを自然体で進めるようになる。

5. 2 英語の学び方が変わる

iEARN プロジェクトの一つにテレビ電話やISDN回線を使った国際間テレビ会議がある。テレクラスと呼んでいる日本発のプロジェクトである。日本からの参加校の一番の問題は、やはり生徒の英語によるコミュニケーション力・プレゼンテーション力である。どうかすると、自己紹介まで用意したメモを読むという具合である。しかし、英語を何年も習ってきて、なぜ聞けず、なぜ話せないのか。同じように英語が第2言語である国との交流や共同学習であっても、大抵は相手校の達者な英語に圧倒されている。その理由は明白で、つまりそのような語学学習をしていないからである。教科書の難解極まる英文をノート左頁に写し、右の頁にはその日本語訳を書き込む。将来、翻訳家を目指すのであれば、そうすればよい。しかし今、日本人にとって必要な語学力は、相手の話している内容を正確に把握する一方で、自分の考えをまとめ、会話であれプレゼンテーションであれ、相手に伝えられることである。ネイティブのように流暢に話す必要はないが、表現豊かに、ユーモアをもって、誠実に話す訓練がいる。会話を自然

に続ける訓練がいる。曖昧な笑みを浮かべていても気味悪がられるだけであろう。

しかも、インターネットが英語を使った世界であるという日本にとっては厳しい現実を、見て見ない振りをしている現状がある。そのインターネット社会が、今の生徒たちが成人して仕事をするビジネスの世界なのである。そこには混玉併せ持った情報が溢れてあり、一々、日本語に置き換えていけるほど時間の余裕はない。徹底した速読とポイントを掴む訓練がいる。

またキーボードが昔の算盤の扱い方と同様に、意識しないでタッチできるスピードが必要である。これも訓練。使う単語やフレーズは、大方の場合は先方のメールや資料に必要な言葉が十分にあるので使わせてもらう。書く文体は、たかだか何種類かの文型である。頭で理解するよりも慣れる、教をこなすのが言葉という道具の手の入れ方だ。

楽しみながら、しかも相手からの反応を得ながら、これらの訓練を全てできるのが、iEARN プロジェクトである。日本人にとってお話し向きではないか。iEARN プロジェクトに参加したいために、世界の仲間と交わりたいために英語教育があると言える。

5. 3 参加して教科学習にも目的が出来る

英語という学科だけではない。日本語・社会・歴史・科学・福祉・環境・数学・音楽・美術、どれをとっても対応する iEARN プロジェクトがある。前述のプロジェクト以外にも、ホロコスト、少年兵、子どもの労働、ドラッグなど重いテーマもあり、年間で 100 件を越すプロジェクト数である。例えば、一単元を終えた時、発見や意見を英語でまとめ、該当する iEARN プロジェクトに送る。そのまとめは、プロジェクト参加作品として、他の参加国の作品と並んでウェブ上や製本された出版物に載る。或いはプロジェクト毎に用意されたフォーラムで、海外の参加生徒と互いに意見交換ができる。これは期末考査後の数値による、或いは他の生徒との比較による成績表とは異なった、生徒の努力や育ちへの海外からの評価である。前者がよくマイナス的な評価に対して、後者は励ま

しの評価となり、どちらが次のステップへのやる気を起こさせるかは明白である。もし iEARN プロジェクト参加を目的として、その意思で学科に取り組むなら、自主的な学びへと興味も態度も変わるだろう。

5. 4 情報教育の学び方が変わる

生徒が一番欲しい技術を、一番欲しい時期に渡す。これが一番、効果的な教え方であろう。他の生徒のパワーポイント発表を見て、自分の発表も使いたくて仕方がない。でも分からない。その時、教えたことは 100% 無駄なく、その生徒に吸収され生かされる。必要としない時期にカリキュラムだからと時間を割いたとしても、教師と生徒の互いの時間の無駄である。一人一人の違ったニーズに教師は勿論対応できないが、上級生が兄弟のように下級生を指導する時間を組み込んでおけば、それは上級生にとっても、教え方、辛抱、おもしろいやりなど、技術指導以外の学習ともなるだろう。

6. iEARN を通して見る学校のグローバル化のゴール

一般的に国際交流を言う時、「異文化を理解する。自分を知り自国の文化を認識する。」と多くの人は言う。インターネットで異文化情報をふんだんに取り込み、電子メールで海外の生徒とやりとりする。テレビ会議で異文化の中で生活する人と討論する。或いは訪問しあって握手する。しかし、これらの目的が単に互いを理解するためだけであれば、十分なグローバル化とは言えない。理解しあって、それで、どうするのか。問題はそれからだ。ビジョンとゴールを設定し、そのゴールに向かって双方の行動が伴わなければ、所詮、知識を満足させるだけの交流となる。前述の英語教育がどんなニーズのための学習なのか、教師も生徒も分っていなければ、恐ろしく無駄な時間をかけて、わざわざ英語嫌いを作って卒業させるように、このグローバル化も異文化の物知りばかりを作ることになりかねない。

グローバル化はなぜ必要か。青臭い言い方であるが、やはり "For The Better World To Everyone" で

ある。iEARN プロジェクトを通して「グローバルファミリー」を実感できれば、衣食住がなく学校に行けない子どもに、虐待を受ける子供に、寂しく亡くなる老人に、家族としての思いやりを示し、家族としての責任の一片を担うのではないか。そうする意義を納得すれば、生徒によって問題解決へ次の一歩が模索される。プロジェクトを組んで学習している海外のパートナーと共に決めて果たす責任は、もっとやり甲斐があるかもしれない。互いに実行し行動の成果を発表しあうのもいい。

そうして幼年時から培われたグローバルファミリー意識は、20世紀の戦争と環境破壊で21世紀へ持ち越される多くの宿題を違った切り口で癒していくに違いない。

6. 終わりに

ある県立教育研修所の依頼で、教師研修をすることになった。その前に参加する教師に対して、事前に準備をお願いした。その準備とは、ウェブ上のiEARNのプロジェクトリストへ行って、その中から興味を持った5つのプロジェクトを選んで欲しい。またその一つを選んでレッスンプランを立てて下さいというものだ。その結果が郵便で届いた。一枚一枚見ていると、皆さんが100数件のプロジェクトをかなり時間をとって調べ選んでいるということが分かる。また、レッスンプランはさすがにプロの教師である。明日のクラスで早速にiEARN参加が実現していくようだ。この時、

既に教師は、21世紀のITを利用したGLOBALな教育の流れを知り、流れにつながっているのだ。

iEARN プロジェクト経験は、将来、仕事に社会に生かされる。仕事上でのグループワークに必要な、国際性、民主性、国民性、人間性、協調性、主体性、創造性が子供時代からのiEARNプロジェクト参加で養い磨かれ、その表現力やIT技術とともに、日頃の自信とキャリアとなって自然に発揮される。

2003年夏、第10回iEARN国際会議は、日本がホスト国となって、兵庫県三田市関西学院大学ほかで開催される。上記の教師たちが、iEARNプロジェクトを通して子どもたちがとった小さな行動を、行動を通して生まれた小さな変化を、会場に集まった世界中の教師に、日本の教師に、きっと誇らしく語るのだろう。

課題は多いけれど、私たちはこの小さな世界人に未来を託していけるに違いない。

参考物件

iEARN URL <http://www.iearn.org>

iEARN Japan URL <http://www.jearn.jp/iEARN>

Teleclass URL <http://www.jearn.jp/Teleclass>

JEARN URL <http://www.jearn.jp>

「産業と教育」2002年3月号 財団法人産業教育振興中央会

「ここまで来たインターネットによる国際交流」新100校プロジェクト